

図・本館

ギリシア悲劇における死の受容についての研究

(研究課題番号 10610535)

平成10年度～平成12年度科学研究費補助金

(基盤研究(C)(2))

研究成果報告書

平成14年3月

研究代表者 吉武純夫

(名古屋大学文学研究科助教授)

はしがき

本冊子は、「ギリシア悲劇における死の受容についての研究」と題した科学研究費補助金基盤研究(C)(2)の、未発表の研究成果を収める報告書である。

悲劇を中心として、ギリシア文学の中には死の運命を受容する様々な場面が描かれている。やむを得ず甘受する場合もあれば、自ら進んで受容れる場合もある。いずれの場合でも、人物達は死を受容するとき、必要ならばいろいろな理由をつけて、それをよきものとして受容れようとする。しかし興味深いのは、死をよきものとして手に入れることのできる機会に女性は男性よりも恵まれていない、という印象を受けることである。やむを得ぬ状況に追い込まれて自殺するのは圧倒的に女性が多いが、それは単に女性が弱いからではなく、状況を打開する道が塞がれていることが多いからである。構造的に男性はよき死を死ぬ機会がより多く保証されていた。それを象徴するのが、名譽の戦死である。それを彼らは「美しい死」(カロス・タナトス)と呼んだ。戦争に参加する義務を負う男性は「美しく死ぬ」資格を持っていたが、女性は「美しく死ぬ」資格を本来的に欠いていた。もしも「美しく死ぬ」ことを願っても、彼女らにはそれがかなわない、というのが悲劇の女性達のおかれた状況であった。男性がそういう状況から自由であるというわけではないが、女性がよき死を得られないという状況が悲劇においてはより多く描かれる。その周辺の事情を、ソポクレスの『アンティゴネ』に探ることが、この研究の中心となった。その成果は西洋古典学会で発表する機会を得た。と同時に、「カロス・タナトス」という概念についての基本的な認識を構築する必要性が痛感された。それは予想外に時間のかかる作業で、この報告書には前半部分しか載せることがかなわぬこととなったが、これまで見過ごされてきた重要問題を掘り起こした意義はこの短い報告の中にも見出せるものと信ずる。ここに掲載できない後半部分は、『名古屋大学文学部研究論集』平成14年号に掲載する予定である。

研究組織

研究代表者 吉武純夫 (名古屋大学文学研究科助教授)

研究経費

平成10年度	700千円
平成11年度	600千円
平成12年度	600千円
<hr/>	
計	1900千円

研究発表

(1)学会誌等

吉武純夫、「アキレウスの賞品供与(パトロクロスのための葬礼競技における)」、『名古屋大学文学部研究論集』第133号、平成11年3月

吉武純夫(訳)、ニコル・ロロー、「アンティゴネの手」、『現代思想』、第27-9号、平成11年8月

吉武純夫、「カロス・タナトス、アンティゴネの目指したもの」、『西洋古典学研究』第50号、平成14年3月

(2)口頭発表

吉武純夫、「ポリスの中の野蛮：古代ギリシアの社会と神話」、名古屋大学文学研究科公開シンポジウム、平成12年7月

吉武純夫、「カロス・タナトス、アンティゴネの目指したもの」、日本西洋古典学会第52回大会、平成13年6月

(3)出版物

吉武純夫、「ポリスの中の野蛮：古代ギリシアの社会と神話」、阿部泰郎、小川正廣編、『“文明”とは何か“野蛮”とは何か：新しい人文学の構築をめざして』、名古屋大学文学研究科、平成13年3月

目次

はしがき	i
カロス・タナトスとは何か（上）	1
はじめに	1
1. 問題	3
2. 「カロン」という語	7
2.1 <i>Hippias Major</i> における「カロン」	7
2.2 Homerosにおける「カロン」	9
3. <i>Ilias</i> における「カロン」なる戦死体	18
3.1 <i>Ilias</i> 22.73 の問題点	18
3.2 「適合関係のよさ」	20
3.3 「光景それ自体の良好性」	22
3.4 若さゆえの「カロン」	23
3.5 軍事的良好？	25
3.6 poetic purpose	28
3.7 結論	28
Bibliography	30

「カロス・タナトスとは何か（下）」の構成予定

4. Tyrtaiosの「カロンなる死」
5. 戦死ではない「カロンなる死」
 - 5.1 協和音
 - 5.2 不協和音
6. まとめ
- Bibliography
- Appendix

（平成 15 年 3 月刊行予定）

カロス・タナトスとは何か¹(上)

はじめに

もとより、人間にとって難儀な事象である「死」を、何らかの好感を表す語で形容することがむやみに行われることでないことは、普遍的な事実であろう。もちろん、より難儀な状況の中にあってそこからのやむを得ぬ打開策または逃避手段として死ぬことをよしとすることはいくらでもある。古代ギリシア文学で *an / ke kerdion eiē* というフォーミュラが死に適用される場合はその典型的な例である (e.g. *Ilias* 22.108; *idem* 6.410)。そのほか、死欲求を率直に語るような場合でも、譲歩して死を受容れるような場合でも、その見返りとして何らかの救いあるいは報いが目指されていることが通例である。

しかしその中であって、「カロン」という語が死を形容するケース—それはギリシア文学の中では長きにわたって見られる現象である—は、異色である。悲劇を始めとする多くの場合、死が「カロン」という形容をもって受容されれば、大抵もうそれ以上死の目的が問われることも主張されることもないのである。「カロンなる死」それ自体が死受容の最終目的をなし、死受容の *justification* をなす。「カロン」なるものとして示された死は、いわば絶対的な善となるのである。

「カロンなる死」というこの表現が戦死を表すことが多いことはよく語られている²。しかし、このことの意義はあまり認識されていない³。そのことがギリシア文学の中のそれぞれの場面でどのような効果を生んでいるかは殆ど議論されていない⁴。それは実は、文

¹ 本稿においては、*kalos* という語の派生語によって形容される何らかの事物を、その性・数・格、比較の級、品詞を問わずに表そうとすると、語尾変化を表示する煩雑さを避けるために敢えて中性形とカタカナを用いて「カロンなる～」と表示することにする (e.g. 「カロンなる死」)。そして、*kalos* という語の派生語、すなわち性・数・格、比較の級、品詞において何らかの適当な形に調整されたもの (複合語は含まない) を単語として表そうとすると、それらは全て、やはり中性形とカタカナを用いて「カロン」と表示することにする。また、*thanatos* の派生語全てを、「タナトスの語」と表示することにする。

なお、表題には一般に使用されるカロス・タナトス (*kalos thanatos*) という形を用いるが、本文においては、*kalon... thanein* などの用例があることを考慮して、同じ内容をあらわすのにも「カロンなる死」という形を使う。ビブリオグラフィは末尾に一括して掲載する。

² Humphreys (1983), 148; Vernant (1991), 50-74, 84-91; Loraux (1986), 100; Loraux (1995), 63-74; Morris (1989), 304 など。

³ 「カロンなる死」という話題は、Garland (1985) にも、Sourvinou-Inwood (1995) にも殆ど取り上げられていない。

⁴ たとえば、*S. Antigone* に記されている「カロン」なる死 (72, 97) について、Benardete (1999), 11-12 や Oudemans & Lardinois (1987), 172 は、それが戦死を暗示する表現であることを記すが、そのことが劇の中でどういう役割を果たしているのかを記述するには至らない。その後のコメントリも研究

学の中に意図されたこの表現の含意をとらえるに十分な理解が得られていないからである。戦死以外の死も同じく「カロンなる死」と表される場合が少なくはないという事実を見れば、それ以上のことは何も言えないように見える。この表現が戦死に対して与える称賛の特殊性も、また戦死以外の死に対して与える称賛の異質な響きも見えてこない。しかし見落としてはならないのは、「カロンなる死」と表されたものが戦死であることが多い、という背後には、Homeros から悲劇までの 3 世紀間を通して、この表現が表したのはもっぱら戦死のみであったし、それは *Ilias* と Tyrtaios が提唱した明瞭なモデルに従った現象であった、という事実である。

本稿は、この事実を把握することによって、「カロンなる死」という表現が前 5 世紀の悲劇で多用される時、どのような意味を含み持つものであったかを明らかにしようとするものである。

も、この点を取り上げたものはなかった。拙論：吉武純夫(2002)、44-55 を見よ。

1. 問題

実際、*Thesaurus Linguae Graecae* に収められている前 8-5 世紀の作家達の作品群から、「カロン」の語が死を形容しているケースを探すと、次のような結果が得られる⁵。

A 群: 明らかな戦死を形容して使われているケース: 27 件

悲劇の中では: *Agam.447*, *Cho.354*, *Sept.1011*, *Hek.310*, *Hek.329*, *Tro.386*⁶, *Tro.402 (olesthai)*⁷。

悲劇以外では: *Ilias22.73*⁸ ; *Tyrt.10.1(West)* ; *Tyrt.10.30* / *Alkaios400.1PLF* / *Simon.26.1.2(potmos)* ; *idem,AP7.253.1* / *Hdt.1.30.24(teleutēsai ton bion)* ; *Hdt.8.100.9* / *Thuc.4.40.2.4* ; *Lys.34.6.5* ; *Isokr.Arch89.11(teleutē)* / *Xen.Hell.4.8.38.6* ; *idem,Hell.7.5.18.12(teleutē)* ; *idem,Anab.3.1.43.6* ; *idem,Anab.3.2.3.3* ; *idem,Lak.9.1.2* / *Plat.Leg944.c.7* ; *idem,Menex.234.c.2* ; *idem,Menex.246.d.2(teleutān)* ; *idem,Menex.248.c.4(teleutē)*。

B 群: 死の種類・性格について特定のないケース: 9 件

悲劇では: *Aias479* / *IA1252* / *Eur.Erechtheus Fr.361.1* / *Eur.Fr.994.1*。

悲劇以外では: *Andok.Myst.57.4-5(apollesthai)* / *idem,Myst.57.7* / *Isokr.AdDem43.8* ; *idem,Paneg95.7* ; *idem,AdNic36.8*。

C 群: 戦死とは異なる死に適用されたケース: 18 件

そのうち、C1 群⁹: 戦死と何らかの類似性を持つ死に適用されていると考えられるもの

⁵ TLG CDROM #D の 8-5 世紀の作家から、*kal-* の語が、5 単語以内の距離において、*-than-/thna-/thnē-/thne-*、あるいは *-pese-/peso-/pesō-/pipt-/pept-*、あるいは *-ole-/olē-/olou-/olō-/ollu-/ōles-*、あるいは *-teleut-*、あるいは *potm-* の語を伴って現れるケースを検索し、その中から「カロン」と「死」に関係のない語が検索されている例を排除した。検索には、TLG Workplace, 6.00(1997)を使用した。ABC 群への分類については、Appendix を見よ。なお、「死」を表すのに *thanatos* の派生語以外の語が用いられている場合は括弧を付して指摘する。

⁶ *kalliston* は *kleos* にかかるが、それは *ethnēiskon* の apposition となっている。

⁷ 死を表す語が同一の文章内に明瞭に示されている訳ではないので、*Eur.Suppl.783(kalon theāma)* は含めていない。

⁸ *kala* は *panta* にかかるが *thanonti* なる人の外貌全体を形容していると考えられる。戦死のどういう側面を形容しているかについては問題があり、3 章で論じる。

⁹ C1, C2 への分類については、5 章を見よ。

は、

悲劇では: Ant72 ; Ant97 / Aias1310 / IT322 / Or.781 / Or.1152 / Ion858 / Tro.1282.

悲劇以外では: Xen.Cyrop.1.4.11.11-12 / Lys.2.79.5 / Isokr.Paneg77.4 / Plat.Epist.334.e.1.

C2群:戦死とは何らの関係もない死に適用されていると考えられるものは、

悲劇から: Agam.1310 / Eur.KretesFr.472.46(=86.46Austin) / Hel.298.

悲劇以外から: Xen.Mem.4.8.2.2 ; idem.Mem.4.8.3.1-3 ; Plat.Leg.854.c.4.

明らかに戦死をさして使われた例(A群)は、5世紀末までに生まれた作家の作品群の中に計27件にのぼる。この数は、戦死とは明らかに異なる死に適用されたケース(C群)の数17件¹⁰を確実に上回っている。「カロンなる死」という表現は、このように、時代を下っても減衰することなく戦死の形容として使われ続けたわけだが、戦死以外のものに適用されたのはA.Agam.1610(458年)が最初である。つまり、*Ilias*に見られるその原型と思われる例(*Ilias*22.73)から3世紀間にわたっては、この表現はもっぱら戦死を意味する場合にのみ使われていたといえることができる。

この事実が示唆するのは、少なくとも前5世紀中頃までは「カロン」という語の使用法にはある「標準」が存在し、それによれば、何らかの良好性を表すこの語は死¹¹を形容する言葉としては、戦死を称賛しようとする場合にのみ使うことが許される語であった、つまり、死という難儀について適用することは通常では避けられたが、戦死に固有の何らかのメリットを表すためにだけ特別に適正とされた、ということである。その間、人々は敢えてこの標準に逆らってこの表現を用いようとはしなかった、一言で言うならば、よきものとしての戦死ということが「カロンなる死」という表現のほぼ全幅を占める意味として当初において確立していたということが考えられるのである。

そうだとすれば、Agam.以降「カロンの語」が標準を侵していれば強引に戦死以外の死に適用され始めたときも、これを聞く人はそのことを明確に察知し、そこにあてがわれるべき意味は「カロンなる死」が持つ標準的な意味との対比において模索されたはずである。

¹⁰ これは、どのような場におけるどのような死かを特定せずに言っているケース(B群:9件)とは区別される。

¹¹ ただし「タナトス」の語という限定を付する必要があるかもしれないことは、5章で述べる。

その標準的な意味とはどんなものであったのだろうか。前7世紀の Tyrtaios は、まさに「カロンなる死」とは何か、理想的にはいかなる死が「カロン」なのか、を定義した、現存する文献上では最初の人である。彼はそのエレゲイア詩の冒頭の句で単刀直入に、

τεθνάμεναι γὰρ καλὸν ἐνὶ προμάχοισι πεσόντα

ἄνδρ' ἀγαθὸν περὶ ἧι πατρίδι μαρνάμενον: (Fr.10.1-2 West)

と語り、「勇敢な人士が祖国のために戦い、前線において倒れ死ぬこと」が「カロン」なのだと言った。それ以降、少なくとも悲劇の時代が来るまではそれに不協和音が生ずることはなかった。上の分類のA・B群に属する Tyrtaios 以降の例は全て、彼が提示した「カロンなる死」のイメージとほぼ同じものを前提にして語られていると捉えて差支えないだろう。Tyrtaios の提唱は明らかに *Ilias* 22.73 の文言を踏まえている。ただし、*Ilias* のこのパッセージは文脈からしても文言からしても「カロンなる死」の定義であるとは言いがたいし、3章に見るように、何をどういう意味で「カロン」としているのか不明なところもある。もともとこれらの2者が表そうとしたことは同じではなかった。しかしともかくも、両者の言い分を合わせて安全に言えることは、「若い戦士が祖国のための戦いの最中に前線において斃れて死ぬ」ならば、その死は「カロン」であり、その戦死者は「カロン」なる人であり、彼の切り苛まれた死体は「カロン」なる見物、ということである。それが5世紀における「カロンなる死」の標準的なイメージであった。

しかし問題は、戦死がもしその条件を完全に満たさないときは「カロン」たり得ないのかということである。「カロンなる戦死」は、どういう要因ゆえに「カロン」とされるのか？ また、なぜ他ならぬ「カロン」の語で形容されるのか？それが分かれば逆に、戦死以外の死が「カロン」とされている場合でも、どうしてそれが「カロン」なのかということや、どういう意味で戦死にたとえられているのか、を判断したり、あるいは、全く新しい意味で「カロン」とされている場合を見分けることができるはずである。

そのために最重要なのは、*Ilias* と Tyrtaios はどのような意味で戦死なり戦死体なりを「カロン」なるものとみなしたかを分析することである。この課題に対しては、従来どのような究明がなされてきたであろうか。「祖国のため」あるいは「若くして(死ぬ)」ということに「カロンなる死」たることの本質を見ようとする見解がある¹²。しかし実は *Ilias* も Tyrtaios もそれを必要条件としているわけではない。「カロンなる死」の要件となるその

¹² 祖国のため: Aristoteles, *Rhet.* 1366b37; scholia vetera (Erbse (1969) ad *Ilias* 22.71-73; Vernant(1991), 64. Bowra(1957), 37 も、Aristot. に倣った考え方をとっていると思われる。若くして: Vernant(1991), 59-64, M. Bloch(1982), 228.

他の事項も見落としてはならない。Vernant は、死、死者、死体なりが「美しい」というのはどういうことかを正面から説明使用とした稀な研究者である。彼は *Ilias* において、戦死体に見出されるとされる、*hēbē* の名残—それは死体凌辱によって損傷される肉体的要素である—が、beautiful death を構成するという。戦死体の外貌に映し出されている美が、死体凌辱の詩的効果を高める元手となるのだと主張するのは正しい。しかし、死体の「美」という概念は大雑把であるし、「カロン」の語の使用については殆ど注意を向けていない¹³。Tyrtaios 以降の、事象としての「カロンなる死」というトピックにも十分な注意を払っているとは言いがたい¹⁴。一方 Adkins は、Tyrtaios が「死(ぬこと)」という事象自体を捉えて、これを「カロン」だと見做したことの新鮮さを指摘し、また彼が「カロンなる死」を物質的(視覚的)側面と抽象的側面の両面から捉えていることを指摘した。しかし、戦死が「カロン」であるとはどういうことかを説明しようとはしなかった¹⁵。Loroux は、Tyrtaios 以降の戦死を称揚するポリス・イデオロギーを詳しく考察したが、死を「カロン」の語で形容することの意味については殆ど何も議論していない¹⁶。そのほかには、「カロンなる死」とは何か、死が「カロン」であるとはどういうことか、を議論しようとした研究はどこにも見出すことができない。

そこで本稿は以下に、まず *Ilias* と Tyrtaios が「カロン」の名のもとに行った戦死の肯定的受容はそれぞれどんなものであったかを分析する(3,4章)。しかしそれは、彼らの時代(8,7世紀)における「カロン」という語の意味を確認したうえでとりかかるべきである(2章)。それらの結果をもとにして、「カロンなる死」の「標準」に反する用法が5世紀において果たしてどの程度行われていたかを手短かに考察する(5章)。

¹³ Vernant(1991), 50-74, 84-91.

¹⁴ Loroux(1995), 275n25 は、Vernant のこの点についての批判を一言だけ記している。

¹⁵ Adkins(1977), 84-97. cf. Adkins(1960), 163-64.

¹⁶ Loroux(1986), 98-118; Loroux(1995), 63-74.

2. 「カロン」という語

Ilias と *Tyrtaios* が打ち出しているの「カロンなる死」を見る前に、彼らの時代における「カロン」という語を正しく理解しておく必要がある。特に、*Ilias*22.71-73(*neōi de te pant' epeoiken...keisthai: panta de kāla thanonti per hotti panēēi*) と *Tyrtaios*10.30(*kālos d' en promachoisī pesōn*)の解釈に際しては、(1)「カロン」が与格語を伴う場合の語法と意味、(2)「カロン」が不定詞を形容する場合の語法と意味、(3)「カロン」が軍事に関する事項や男性人物を形容する場合の意味、が問題になる。これらの点について一般的な意味と用法を確認しておかなくてはならない。*Tyrtaios* の用語法は *Homerōs* のそれに準ずるものと考えられるので¹⁷、*Homerōs* の「カロン」に焦点をあてて検討してみることにしよう¹⁸。

2.1 *Hippias Major*における「カロン」

しかしその前に、カロンという語の古典期における一般的な意味を概観しておくのが好都合である。というのは、「美について」(*peri tou kalou*)¹⁹という副題が付されることもある *Platon* の対話篇 *Hippias Major* が、「カロン」とは何かをギリシア人自身の言葉で整理して我々に提示してくれているからである。そこには、「カロン」という語についての5世紀末の一般的認識と、一般には自覚されていなかったような哲学的認識とが混じり合っているが、*Sokrates*の言説だけでなく、それに対する *Hippias*の反応と、「カロン」という語の語法とに注目すれば、その頃におけるこの語の標準的な意味と用法をかなり明確に探ることが可能である。「カロン」という語は、

(ア)相応しさ(*prepein*) (293d-294e)²⁰、

(イ)有能・有用性(*dunaton, chrēsīmon*)=機能的良善性²¹ (295a-296d)、

(ウ)有益性(*ōphelimon*) (296d-297d)、

¹⁷ Adkins(1977), 60.

¹⁸ Autenrieth(1887, 1995)の *Homerōs* 辞書は、*kālos* の形容詞としての意味を2つあげている：①beautiful of form, in build; ②fitting, becoming. ただし②は与格支配としてである。一方、LSJは、①outward formに関して; ②useにかんして; ③moral senseとして、いずれも beautiful という意味があると記し、Autenriethの②の意味も与格支配もあげていない。不定詞を形容する用法は③においてあげている。

¹⁹ Diog.Laert., 3.60.2.

²⁰ Aristoteles, *Topica*135a13は、「カロンなるもの(*to kalon*)」と「適合したもの(*to prepon*)」は同じもの(*t' auton*)であるとしている。cf.102a6.

²¹ 「役割・任務を立派に果たすこと」をさすこととして、このように言換える。

(エ)視聴覚的快(*chairein / hēdu dia tēs akoēs kai tēs opseōs*)²² (297e-303d)、
を表す、というこの対話篇に現れる主張は²³、網羅的なものとはいえなくとも、どれも一
般的認識に反するものではないだろう。

さらに一つ *Hippias Major* の記述の中で注目すべきことは、「カロン」が、与格を伴って
使われる場合(291d-293e)と、与格を伴わずに使われる場合とがあったということであ
る。与格語を伴って言うときは、何物かへの似つかわしさ、言換えると「特定対象との
適合関係のよさ」²⁴を表すことを明確化しようとする場合であった²⁵。他方、与格語によ
る限定をしない場合は、すべての対象(*panti*)との適合性、いわば普遍的な「妥当性」²⁶
を表している場合もあるし、適合関係や妥当性の意識なしに、何らかの領域²⁷における
いわば「絶対的良好性」を表すものとして言われる場合もあった。

総じて、「カロン」とはいつも、形容される対象の何らかの良好性を表す語ではあるが、
それには、「特定対象との適合関係のよさ」を表そうとして語られる場合と、「物事自体
の良好性」を表そうとして語られる場合とがあった。前者の場合であることを明確化し
ようとするときには与格語が付された²⁸。前者を表すことと後者を表すことは排他し合う
ものではない。たとえば X が Y に対して「カロン」である(適合している)ということは、X
そのものが「カロン」である(妥当である、または(イ)(ウ)(エ)の意味において良好であ
る)ということを妨げるものではない。しかしまた、(*Hippias* にすんなりとは理解されぬ

²² 正しくは、「視・聴を通しての快」。

²³ 北嶋(1975), 209

²⁴ (ア)に属する。290c7 から頻出する *prepein* の語で表されている。

²⁵ 「カロン」が与格を支配するケースは 5 件記されている。①～④は不定詞を形容するものである
が、⑤は「金」という物体を形容するものである：

①291.d.9-e.2: Λέγω τοίνυν ἀεὶ καὶ παντὶ καὶ πανταχοῦ κάλλιστον εἶναι ἀνδρῖ,
πλουτοῦντι, υἱαίνοντι, τιμωμένῳ ὑπὸ τῶν Ἑλλήνων, ἀφικομένῳ εἰς γῆρας, τοὺς
αὐτοῦ γονέας τελευτήσαντας καλῶς περιστείλαντι, ὑπὸ τῶν αὐτοῦ ἐγγόνων καλῶς
καὶ μεγαλοπρεπῶς ταφῆναι. / ②292.e.8-a.1: "Ἡ καὶ τῷ Ἀχιλλεῖ," φήσει, "ὁ ξένος
ὁ Ἥλειος ἔφη καλὸν εἶναι ὑστέρω τῶν προγόνων ταφῆναι, καὶ τῷ πάππῳ αὐτοῦ
Διακῷ, καὶ τοῖς ἄλλοις ὅσοι ἐκ θεῶν γεγόνασι, καὶ αὐτοῖς τοῖς θεοῖς;" / ③
293.a.7-9: "Ἴσως τοίνυν σὺ εἶ οὗτος," φήσει, "ὅς παντὶ φῆς καὶ ἀεὶ καλὸν εἶναι
ὑπὸ μὲν τῶν ἐγγόνων ταφῆναι, τοὺς δὲ γονέας θάψαι: / ④293.c.1-5: ἔτι δὲ μᾶλλον,
ὡς ἔοικεν, ἀδύνατον πᾶσι τοῦτό σξ. τὸ θάψαντι τοὺς προγόνους ταφῆναι ὑπὸ τῶν
ἐγγόνων γενέσθαι καὶ εἶναι καλόν, ὥστε τοῦτό ... τοῖς μὲν ἐστι καλόν, τοῖς δ' οὐ
καλόν. / ⑤293.e.2-3: ἡνίκ' ἔφαμεν τὸν χρυσοῦν οἷς μὲν πρέπει καλὸν εἶναι, οἷς
δὲ μή, οὐ, ...

²⁶ やはり(ア)に属する。

²⁷ (イ)(ウ)(エ)にあたる。

²⁸ なお、たとえば「私の目には美しく見える」などを表す「判断者を表す与格」('dative of
reference': Smyth, §1496)の例は、少なくともこの書物においては見受けられないことも言い添え
ておく。

逆説的なこととしてではあるが) 後者を伴うことなしに前者だけが成立ちうることも示唆されている²⁹。

「カロン」の語の意味と用法には、少なくとも 5 世紀においては、以上のような枠組みがあったのである³⁰。

2. 2 Homeros における「カロン」

では、Homeros における「カロン」の意味と用法はどうであろうか。5 世紀の意味と用法を参考しながら、Homeros の 2 作品における計 380 件 (*Ilias*195 件、*Ody.*185 件) に上る「カロン」の全例を視野に入れて、この章の冒頭に示した 3 つの点に関して補足・補正すべきことを考えて見る。

2. 2. 1 検討: 問題(1)「カロン」が与格語を伴う場合の語法と意味

問題(2)「カロン」が不定詞を形容する場合の語法と意味

Homeros において、「カロン」が与格を伴っているケースは、6 件あるのみである。そのうち 5 件においては、揃って「カロン」が行為を形容しており、与格語はその行為者を代名詞で表したものである。さらにそのうち 4 件は行為を不定詞で表しており (*Ilias*9.615/ 21.440; *Ody.*6.39/ 17.583)、残りの 1 件 (*Ilias*24.52) は Achilleus が Hektor の死体を引き回し続けていることを受けた *to* という指示詞で表している。これら 5 件の意味は、一般に、特定の人物が特定の行為をすることの好ましさを表したものとして解されているが、そのように解してもこれら 5 件に限っては殆ど問題は起こらない。これらの一連の例には一つの確立した語法に従った一定の意味が期待されてよいであろう。しかし、問題なのは、3 章で議論の焦点となる *Ilias* 22.73 の一件である。というのは、この 1 件が他の 5 件と大きく違った内容によって構成されているからである。つま

²⁹ 290b-291c が力説していることは、象牙や黄金の彫像の目に入れる石や、土鍋に添える無花果の杓子など、そのもの自体が特段良好だというわけではないものでも、相応しさのみのゆえに「カロン」なりと言えることがあるということである。つまり、X そのものが「カロン」であるということなしにも、X が Y に対しては「カロン」であるということもありえたのである。

³⁰ なお、Aristoteles, *Rhet.*1359a5 および 1366b29-67b30 は、「カロン」なるものとは、「徳や善を為すもの」、「金銭的な褒美を目指さず、名誉がその褒美となるようなもの」、「利他的なもの」、「徳に相応しいもの」だとして、Achilleus の死を「カロン」だと例示もしている。しかし、それは葬礼演説の時代に入って久しい 4 世紀の語感でとらえた分析であり、それが Homeros 時代の語感と同じものだという保証はない。

り、「カロン」が形容しているのは、「目に映るものすべて」(*panta...hotti phanēēi*)という名詞句であり、そこに *thanonti* という形の与格語が伴っているので、「カロン」が、与格で示された人物が行う行為の好ましさを表している、というような構図を見込むことができないのである。その場合、与格と「カロン」の意味はどう解するべきであるのか、安易には判じられないのである。この1件の問題は3章まで保留しておくこととし、ここでは残り5件から分る限りで、「カロン」の語と与格との結びつき方と、それをめぐる「カロン」の意味とを考察したい。

その前に、まず、「カロン」の語が与格を伴うことなしに不定詞を形容するケースを見ておこう。Homeros の中に10件(*Ilias*に2件、*Ody.*に8件)ある。そのうち8件(*Ilias*:17.19/ 19.79、*Ody.*:1.370/ 3.69/ 9.3/ 18.287/ 20.294/ 21.312)は、行為者の限定なしに言われている。その場合の「カロン」は、従来通り、「~すること」という無限定の行為が「それ自体良好であるか否か」を単純に表したものと考えて問題ないであろう³¹。残り2件(*Ody.*:7.159/ 8.549)は、行為者を表す対格語が付された不定法句を形容するものであるが、この場合も同じ考え方が適用されるだろう。すなわち、「カロン」の語は「~が~すること」という限定された行為が「それ自体良好であるか否か」を単純に表すものと考えられる。また、「カロン」の語が、与格を伴うことなく、また不定詞も使わないが、指示詞などの形で表された行為を形容しているケースも、2件ある(*Ody.*3.358/ 9.11)。これらの場合においても、そこに主語が限定されているかいなかにか拘らず、そのような行為・事象が「それ自体良好であるか否か」を単純に表しているものと考えられる。

これに対して、行為自体は不定詞で示されていても、行為者が与格で表されている上記の4件(*Ilias*9.615/21.440; *Ody.*6.39/17.583)の場合は、この与格をどのように解するべきであろうか。結果的には、行為者を対格で示した場合とほぼ同じ意味があるとしても、与格で表されているのが不定詞の主語であると解すべき理由はない。それ以上に問題的なケースは、上記 *Ilias*24.52 の1件である。行為者が与格で表されているのに対して、行為自体は指示詞で表されているのであるから、与格語を行為の主語だというわけにはいかない。「カロン」はこの場合も、与格語の伴わない場合と同じように、行為を単純に「それ自体で良好であるか否か」と示していると考えてよいのだろうか。不定法句を使った場合と意味は違っていなくてもよいのだろうか。

³¹ Yamagata(1994), 228, 232 は、Homerosにおいて、「カロン」が social context の中で 'seemly, acceptable, commendable' の意を表す場合と、時宜・*themis*・good manners に適していることを表す場合があると指摘している。

この問題を解く一つの考え方は、「カロン」そのものは「対象自体が良好であるか否か」を表す、という見方を維持したまま、与格を、「～にかんするかぎり／～のもとにおいて」を意味するいわゆる'dative of relation'³²として、あるいは、「～にとって利益となることなのだが」を表すいわゆる'dativus commodi'³³など、随意的に付されたものとして解する仕方であろう³⁴。しかし、この解し方は *Hippias Major* に示されているような、古典期の「カロン」の適合性を表す用法に繋がっていくものとは思えない。この問題を解くもう一つの考え方もある。それは、Autenrieth と共に³⁵、与格を伴った「カロン」が「特定対象との適合関係のよさ」を表すという用法が、既に Homeros においても存在したと考える仕方である。これは、*Hippias Major* に見られる与格を伴った用法と同じ性格のものであると考えられる。それによるならば、指示詞を使った *Ilias*24.52 の場合³⁶も、不定詞を使った残り4件の場合も、そこに従来訳されてきた通りの意味が認められることとなる。しかし、この場合一つの疑問が生ずる。この場合の「カロン」は「対象自体の良好性」をも含意するものなのかどうかということである。偶然にか必然にか、いまあげた5件はいずれも、特定の人物が特定の行為をするという「取り合わせ」の好悪と、それらの「事象」自体の好悪との間に齟齬のない例であった。しかし、だからといって、それがいつも同様であるという保証にはならない。「カロン」が行為ではなく物体を形容する場合にはさらに事態は違うかもしれない³⁷。2つの対象の間の「適合関係のよさ」は必ずしも各々の「対象自体の良好性」と一致しないのである。*Hippias Major* は、それ自

³² Smyth, §1495; Goodwin, §1172. ただし、Smyth も Goodwin も、Homeros における用例はあげていない。Monro は彼の Homeros 文法にこの項目を挙げていないが、彼の分類で言えば、'locative dative'(§145)の一種ということになるであろうか。

³³ Monro, §143; Smyth, §1481; Goodwin, §11165.

³⁴ ここにあげた2項目に限らなくともよい。諸家の文法体系のどの項目に位置付けるかということとは問題ではない。「対象自体の良好性」を与格なしでも表すものとして組立てられている「カロン」の文に、随意的に付される与格ということである。ただし、「～の眼には」など判断者の主観を表す「判断者の与格」(dative of reference: Smyth, §1496. Monro, §145.7(c)は、これを'locative dative'に位置付けている)は、私見によれば「カロン」に付されることは稀であるように思われる。

³⁵ Autenrieth, s.v. *kālos* は、Homeros における「カロン」は、'fitti ng, becoming' という意味のもとで与格を伴うことを示している。ただし、彼も「カロン」の与格支配については上記の6件しか根拠を持っていないと考えられ、仮説的な記述として受け止めざるを得ない。山形 237 は、「カロン」が'becoming for' という意味をも含むことを示唆しているが、与格語との関連は示していない。LSJ はこの意味項目も、与格支配も記していない。Philon.2.594/ *Ilias* 9.615/ 21.440/ *S.Ant.*72 の与格を伴った「カロン」の例はあげているが、相応しさを表す与格としては示していない。

³⁶ *ou mēn hoi to ge kallion oude t'ameinon*. Hektor の死体を引き回し続けていることは、Achilleus にはより相応しいことではない(彼にもっと相応しいことは別にある)、ということを表すものと解する。

³⁷ 実は、戦死体を「カロン」と形容した残りの1件(*Ilias*22.73)において、この点が問題となるのである。次章で扱う。

体として良好とはいえない対象についても、「カロン」という語は適用されうることを示唆しているように見える。

このように、「カロン」が与格を伴う場合には、構文と意味に 2 つの異なるあり方が考えられるのである。そして、与格付きの「カロン」が「対象それ自体の良好性」をいつも含意するものなのか否か、は判断できないのである。

以上、問題(1)(2)についての考察をまとめると、Homeros における「カロン」の与格支配と行為の形容については、次のことが言える。

- ①「カロン」が行為を形容しているとき、与格を伴わない場合は、不定詞なり対格主語を伴った不定法句なりで表された行為・事象のそれ自体の良好性を単純に表したものと解される。
- ②「カロン」が与格語を伴って現れるケースは Homeros の中に全部で 6 件あるが、そのうち、5 件においては「カロン」は行為を形容しており、与格語は行為者を表すものとなっている。この用法は、行為以外のものを形容するために用いられた形跡は 1 件しかない³⁸。
- ③「カロン」が与格語を伴って何かを形容する場合は、構文と意味のあり方は二通り考えられる。一つは、「カロン」が'dative of relation'などを付された状態の下で、「対象それ自体の良好性」を単純に表す、というあり方である。もう一つは、「カロン」が、形容する対象と与格で示された特定の対象との間の適合関係のよさを表す、というあり方である。
- ④「カロン」が与格語を伴って何か(特に物体)を形容する場合は、「カロン」は形容する対象の「それ自体の良好性」をつねに含意するものなのか否か、不明である。つねに含意するという可能性も、含意せずにも使われうるという可能性もともに見込まなくてはならない。

「カロン」と非常によく似た意味と用法を備えた言葉として、*epeoike / eoike* という動詞もホメロスにおいては多用されたということも無視できない。22.71-73 において「カロン」と深い関係において使われているからである。

(i) 行為を形容する場合、対格主語を擁した不定法句をこの動詞の主語にして、行為・事象それ自体の良好性を表すことができる(*epeoike: Ilias*1.126/10.146; *Ody*.11.186)。

³⁸ Homeros において、「カロン」が物体・人物を形容している場合 (*Ilias* に 181 件、*Ody.* に 155 件) も、声・歌を形容している場合 (*Ilias* に 3 件、*Ody.* に 8 件) も、*kleos·geras* を形容している場合 (*Ody.* のみにそれぞれ 2 件と 1 件) と、風を形容している場合 (*Ody.* のみに 3 件) も、与格を伴って使用さ

(ii)行為者を表す与格語を伴って、何らかの行為を形容することもある。その場合は、特定人物が特定の行為をするという「取り合わせ」の好ましさを表す (*epeoike: Ilias*4.341/22.71)。

この2点は「カロン」とそっくりなのである。しかし大きく異なる点として、次のことも挙げられる。

(iii)与格語を伴って、行為ではないもの(人物)を形容するケースが1件ながら存在する。そこでは、その対象自体のよしあしには無頓着に、与格で表された対象への適合性のみを表していると考えられる (*Ilias*9.392³⁹)。

(iv)この語の基幹部分である *eoike* という語は、対象自体のよしあしには無頓着に、与格語を伴って人や物体が何か「似ている」ことを表すという機能を有し、その用例は多数に上る (*Ilias*に6件、*Ody.*に5件)⁴⁰。

以上、(i)(ii)を見た限りでは、この動詞の与格支配について、「カロン」の上記③と同様な2つの解釈の余地があるように見える。しかし、(iii)(iv)の点から、与格語と結びつくことによって一致・適合を表すことが、この語の基本的性質として確立していると考えられることができるだろう。Autenrieth, s.v.も LSJ, s.v.も、*epeoike* は与格と共に 'befit', 'be fit, proper' (sc. to~) の意味で使われると記している。これらのことから、

(v)*epeoike* の上記(ii)の場合は、「物事自体の良好性」を排除するとまではいえなくとも、「特定の対象との適合関係のよさ」を標準的に表す表現であったと考えられる。

2. 2. 2 検討: 問題(3)「カロン」が軍事に関する事項や男性人物を形容する場合の意味。

*Ilias*22. 73 の「カロン」が形容しているのは戦死体であり、*Tyrtaios*10.30 が形容しているのは戦士である。これらの箇所を検討するには、Homerus において「カロン」の語が軍事的物事や戦士を形容する時には特殊な意味を持つことがあることも承知しておくべきである。「カロン」という語が持つ、このいわば軍事的ニュアンスを、物を形容する場合と、人物を形容する場合とに分けて考察してみよう。

れている例は一件もない。

³⁹ *hos tis hoi t'epeoike kai hos basileuteros estin*. これは、Agamemnon は自身に相応しい男を娘の婿に見つければよい、と Achilles が言い捨てる台詞である。

⁴⁰ *Ilias*: 3.158/ 3.170/ 11.613/ 13.102/ 20.371/ 20.372; *Ody.* 4.143/ 6.243/ 17.500/ 17.511/ 20.194.

まず、「カロン」が武具等を形容する場合である。Homeros において「カロン」の語が衣服・酒器・家具の類や農場・農作物の類を形容している時は、それらの視覚的快を表しているのか、機能的良好性を表しているのか判じがたいのが通例である。それらのもの場合には、見目の良さが、機能的良好性には無頓着に語られてもあまり不自然さはない。しかし、同じ語が武具(*Ilias* に 41 件、*Ody.* に 6 件あり)や城壁(*Ilias* に 2 件あり)を形容する時は、機能的良好性を無視して視覚的快を表しているということは考えにくい。見目の良さに劣らず、機能的良好性を表そうとしたものであると考えるのが自然であろう。というのは、「カロン」なる城壁(*Ilias* 21.447;22.3)とは、Poseidon がトロイアの町を難攻不落にするために築いたものである。また、「カロン」と形容されている武具はすべて、装飾品ではなく、一流の者を含めた战士们⁴¹が実戦で使用する武具として語られているものである。「カロン」なる武具は、有能な戦士、あるいは良好な働きを期する戦士が着用するに似つかわしいものをいうのである。

また、*Ilias* の 41 件中 17 件は最大の英雄 Achilles の新旧の武具について言われている。それらは、神授のものであるゆえに見映えも機能も卓越しているのだということとは容易に理解しうることではある。しかしとりわけ、その旧い方の武具を Patroklos が着用して Hektor と戦うとき、彼はその武具を着けている限りは負けることを知らず、彼が敵に討たれるためには Apollon 神が彼の兜を地面に落とさなくてはならなかったということは、その武具が持つ威力を明らかに示している。そしてまた、まさにその武具を着けた Hektor を Achilles が討ち取るためには、彼も Hephaistos が新たに別の「カロン」なる武具を製作してくれるのを待たなくてはならないのである。「カロン」であることがしきりに強調される Achilles の新旧の武具とは、魔法的といってもよいそのような軍事的良好性を備えた武具のことなのである。そのほか、*Ody.* において「カロン」とされる武具の 6 件は全て、勝利する Odysseus の武具について言われている。

彼らの武具にせよ城壁にせよ、その機能的良好性が言われるべきたびごとに、たまたま持ち合わせている別の性質(見目の良さ)が言われているというのでは極めて不自然である。このことから、Homeros においては、「カロン」が軍事にかかわる物を形容するときには、そこに視覚的快が同時に表されているにせよいにせよ、「軍事的良好性」を表していることが通例であると考えられるのである。

次に、「カロン」が男性人物を形容する場合である。この場合も、同様のことが認めら

⁴¹ Sarpedon, Achilles, Patroklos, Hektor, Menelaos, Idomeneus, Odysseus, etc. 決闘に赴く時の Paris の場合も、その「カロン」なる武具の詳しい描写がなされていることは注目に値する。

れる。Homeros において、「カロン」が(アテナ女神を除く)女性人物(女神達を含む)を表す場合⁴²はすべて「視覚的快」を表していると見て差支えない。しかし、男性人物(男神を含む)を表す場合⁴³には、「視覚的快」を表すものとしてだけでは理解しがたいことがある。男性人物においては、「カロンである」ということは、軍事的良好性を備えているということに他ならない、と考えることが要求される場合がたびたびあるのである。

というのは、ギリシア軍中で最も戦に長けた人物である Achilles⁴⁴がダナオイ勢中で「最もカロン」なる男であるとされ(*Ilias*2.673-4)ているし、また、Memnon(*Aithiopsis*)がトロイア勢中で「最もカロン」なる男であるとされているからである(*Ody.*11.522)。Memnon は、誰よりも *alkimos machesthai*(*Ilias*15.570)とされる Antilochos を倒し(*Odysseia*4.187)、また運命の秤にかけられねばならぬほど Achilles と互角に戦ったと語られる戦士である。さらに、トロイア勢中この Memnon に次いで「カロン」なる *hērōs* である Eurypylos を討ち取ったことが、Neoptolomos の筆頭の手柄としてあげられることとなってくるのである(*Ody.*11.519-20)。もちろん、これは、最も見目のよい男達であった彼らがただ偶然によって、最高の戦士でもあっただけだ、と考えることもできないことはない。しかし、それでは極端に稀な偶然を想定しなくてはならないことになる。彼らの「カロン」さとは、それが「見目のよさ」を含むものであるにせよないにせよ、実質的には「戦士としての有能さ」を意味するものであると解するのがはるかに自然であろう。

男神の中では、ただ軍神 Ares のみが「カロン」と形容されているということ(*Ilias*.18.518; *Ody.*8.310)も、この見方が妥当であること示唆する。また、*Ody.*18.68 では、Odysseus が Iros との試合をしようと「カロン」なる腿を顕わにすると、求婚者達はその腿に感嘆して、Odysseus の圧勝を予見する。この場合は「カロン」の語が人物全体を形容しているわけではないが、この語が Odysseus の戦闘的良善性を表すものとなっていることは明らかである。

また、Paris は実は勇気も力もない男であるのに、ギリシア人たちが「カロン」なる *eidōs* のゆえに彼を *aristeus* であると予想したということが彼ら自身の笑いの種となるだろうと語られていること⁴⁵は、「カロン」なる外貌は軍事的良善性を予期させるもので

⁴² *Ilias*13 件、*Ody.*11 件；人物の肌、踝、腿など、顔以外の身体部分を形容するものはこの中に含まれていない。

⁴³ 同様に、*Ilias*9 件、*Ody.*13 件。

⁴⁴ *Ilias*1.244,412; 16.271,274; 22.288; 9.1165-18,304-06 etc. cf. Nagy, 26-41.

⁴⁵ *Ilias*3.43-45. この3行の解釈は Kirk ad loc.に従うが、Willcock ad loc.に従っても、大体同じ議論が成立つことに変わりはない。

あるということが前提になっていることを示唆する。また、Nireus がアカイア勢中 Achillesに次いで「カロン」であったということと、彼が *alapadnos* であったということが、*alla* という接続詞で結ばれているということ (*Ilias* 2.673-75) も、この示唆を補強するものである⁴⁶。

これらのことから判断できる一つのことは、Homeros においては軍事的良好性は人物の外貌に現れるものであり、いわば、「軍事的良好性を映し出した外貌」を指して彼らは「カロン」と言い表したのであり、通例それがそのまま彼らの本性を言い表すことに他ならなかったということである⁴⁷。しかし同時に、いまあげた Paris の例は、男性人物が「カロン」であるということは、軍事的良好性を伴わずにもありうることだ、ということをも示している。Homeros において「カロン」が男性人物を形容する例のうち、明らかに視覚的快(ないしは性的魅力)を表そうとしたもので、軍事的良好性のあるなしには無頓着に言われていると考えられるケースも6件ほどある⁴⁸。つまり、Paris や Nireus の例も踏まえて言うと、彼らは軍事的良好性を伴わず単に視覚的快を与える外貌を指しても、やはり「カロン」と言い表したのである。そのふた色の外貌が同じものであったか異なるものであったか、我々には知る由もない⁴⁹。しかし両者は、少なくとも言語表現上では区別をつけることのできないものであった。Paris の例が示唆するのは、我々にとっては奇妙なことであるが、言語表現上だけでなく、実際上も彼らの目にはふた色の「カロン」なる外貌は見分けがつきにくかったということである⁵⁰。この他にも、「カロン」が視

⁴⁶ これらのことの名残は、Hdt. 9.72.3 の Kallikrates の場合にも見ることができる。

⁴⁷ Donlan(1973)は、「カロン」は Pindaros までは physical beauty だけを表すもので、inner worth を表すものではなかったというが、対象の内的的性質を表すものでなかったと言い切ってもよいのか、疑問である。外貌を表すものであったとしても、それは同時に内面を反映する、または濃厚に示唆する外貌を言うものであったと考えられる。戦士の場合ならば、戦士としての良好性を反映する(あるいは予期させる)外貌やオーラを備えているということであったと考えられる。

⁴⁸ *Ilias* 3.392 の Paris; *Ilias* 20.233, 235 の Ganymedes; *Ody.* 15.251 の Kleitos; *Ody.* 15.232 の給仕の若者達; *Ody.* 23.156 の湯浴み後の Odysseus。

⁴⁹ 「視覚的快」を与えるということと「機能的良好性」を備えているということが同時に起こるということは、武具や道具の場合には容易に考えられる。たとえば、研ぎ澄まされた刃物などのように、優れた機能を発揮するものが、まさにそのゆえに、見た目にも心地よいものである、というような場合である。しかし、そうでない場合ももちろんあるであろう。たとえば、サンダルなどでは、装飾が凝らしてあり見た目には美しいが、優れた機能を有するものではないというような場合や、表面の仕上げをしていなくとも頑丈で機能に遜色のないというような場合である。武具にしても男性人物にしても、軍事的良好性と、通常の意味の視覚的快(美貌や装飾など)とが両立しえないということはない。

⁵⁰ このことは両者の混同も起こす。Adkins(1960), 164 は、5世紀末まで「カロン」の語には、visual use と moral use との区別がなく、それらが混同して使われることがあったと記している。私の見る限り、Homeros においては「カロン」の visual use は人物・物体に限られたし、moral use は行為に限られていて、その間に混同はない。Homeros の場合、混同の在処はむしろ、視覚的良好性と機能的良好性の間であった。この2つの良好性は連動するという考え方が一方にあり、また他方に

覚的快を表しているのか、軍事的良好性を表しているのか判じ難い例も多数存在する⁵¹。ある場合は、「王に似つかわしい外貌」、あるいは「神に近い者に似つかわしい外貌」を示唆しているかもしれない⁵²。しかし、この語が何らかの機能的良好性を表していると思われる場合は、もっぱら軍事的良好性を表しているものばかりだということができよう。「カロン」という語が男性人物を形容している時は、「視覚的快」を表していることもあるが、機能的良好性が劣らず多く、しかもその場合は「軍事的良好性」を表している事が通例である、ということができる。

以上、問題(3)についての考察をまとめると、Homeros において、「カロン」の語が物体・人物を形容するときに表す意味として、次のものが確立していたといえる：

(A)視聴覚的快。

(B)外観に映し出された、物体の機能的良好性(特に武具の軍事的良好性について適用されることが多い)。

(C)外貌に映し出された、男性人物の軍事的良好性(人物の機能的良好性として表されるのは専らこればかりである。)

はこの2つの良好性がごた混ぜに語られるという実態があったと考えられる。

⁵¹ e.g. *Ilias*3.169:Agamemnon, *Ilias*6.156:Bellerophon, *Ody.*1.301:Telemachos, *Ody.*6.237:Odysseus, etc.

⁵² e.g. *Ilias*3.169:Agamemnon, *Ilias*21.108:Achilleus.

3. *Ilias* における「カロン」なる戦死体

3. 1 *Ilias*22.73 の問題点

Tyrtaios より前の現存文献の中に、戦死そのものを「カロン」なるものとする文言は、実は一つも見当たらない。間接的になりとも「カロン」の語で死を形容している文言は、*Ilias*22.73 があるだけである。そこでは、若者の戦死体(の光景)が「カロン」とされているだけなのである。しかし、Tyrtaios が戦死を「カロン」という語で形容したときには、明らかにこのパッセージを前提としたと考えられ⁵³、彼の思考もこのパッセージと深く繋がっているはずである。*Ilias*のこのパッセージにおいて、戦死体が「カロン」であるとはどういうことなのか、そして、そこには戦死を「カロン」と見做す思考の形跡が認められるかどうか、を考察してみよう。

問題のパッセージは、トロイア勢がみな Achilleus を恐れて城内に逃げ込んだのに、ひとりスカイア門の外に残り Achilleus と対決しようとしている Hektor に向かって、Priamos が語る言葉である。一人で戦うことは避けて城内に退いてくれるよう求めながら、Hektor を失ったときに予想される味方の惨状を語る。

αὐτὸν δ' ἂν πύματόν με κύνες πρότησι θύρησιν 66
ὠμησταὶ ἐρύουσιν, ἐπεὶ κέ τις ὄξει χαλκῶ
τύπας ἢε βαλὼν ῥεθέων ἐκ θυμόν ἔληται,
οὓς τρέφον ἐν μεγάροισι τραπεζῆας θυραωρούς,
οἳ κ' ἐμόν αἶμα πίνοντες ἀλύσσοντες περὶ θυμῶ 70
κείσονται ἐν προθύροισι. νέφω δέ τε πάντ' ἐπέοικεν
ἄρηϊ κταμένω δεδαΐγμένω ὄξει χαλκῶ
κείσθαι: πάντα δέ καλά θανόντι περ ὅτι φανήη:
ἀλλ' ὅτε δὴ πολίων τε κάρη πολίων τε γένειον
αἰδῶ τ' αἰσχύνωσι κύνες κταμένοιο γέροντος, 75
τοῦτο δὴ οἴκτιστον πέλεται δειλοῖσι βροτοῖσιν.

⁵³ Leaf, Schadewaldt, Von der Mühl, Lohmannらは、69-76が文脈にそぐわないものであるとし、Tyrtaiosの文言を元にした後世の付加であると考えたが、Richardson ad 66-76はその考え方には反対している。Verdenius (1969), 354も*Ilias*パッセージの先行性を支持している。私も以下の議論の通り、*Ilias*のパッセージの先行性を認めて差支えないと考える。私はまた、後述するように、69-76が文脈にそぐわぬことはないとも考える。

明らかなことは、ここで「カロン」とされているのは、若者が戦闘で斬殺されて横たわっている姿の、「目に入るものすべて⁵⁴」(73)であるということだ⁵⁵。しかし直ちに生ずる疑問の一つは、その戦死体(の光景)がなぜ「カロン」とされているのかということである。「カロン」とは何らかの良好性を表すものであるに違いないが、若者が斬殺された後⁵⁶の「状態」に、どんな良好性が認められるというのか。血みどろであるに違いないその死体(の光景)は、直視しがたいものであり⁵⁷、それがもたらす感覚は通常の意味の視覚的快とは異なるもののはずである。とすれば、視覚的快を表しうる「カロン」という言葉でもってそれを形容するのは、ひどく逆説的な言説である。その逆説が敢えて語られているのはなぜか。また、どういう意味で「カロン」とされているのであろうか。

71-73 は 'exhortation to die' であるように見えて、Priamos の言い分にそぐわないということが古くから指摘されているため⁵⁸、管見のいくつかのコメンタリにおいては、その前後を含めたパッセージと Tyrtaios 10.23-27 の類似とテキストの先行問題が論じられてはいるが、73 の「カロン」についてのこの問題はその陰で正面から論ぜられることなく済まされている。scholia も、このパッセージの単なる言換えをするだけであつたり⁵⁹、あるいは、祖国や縁者達の益のために死ぬことが「カロン」なのだという、いわば Tyrtaios と同じ視点からの解説を付するばかり⁶⁰なのである。しかし、「死ぬこと」ではなく死んだ後の「死体(の光景)」を「カロン」だと言い、また「カロン」には与格語を添えてもいるこのパッセージは、Tyrtaios が語っていることとはやはり違うのである。73 に関係する見るべき議論を展開したのは Vernant(後述)であるが、彼においても文脈と構文の

⁵⁴ 「すべて」というのは、戦死体のすみずみまでを言っているものと考え。cf. Willcock ad 22.73, Richardson ad 22.73. 73 の「カロン」の主語となっている、眼に映るものとしての戦死体を、以下では「戦死体(の光景)」と記す。

⁵⁵ 戦死体を含む光景を「カロン」とする捉え方は、Eur. Suppl 783: *kalon theāma* にも受け継がれている。

⁵⁶ *thanonti* はアオリスト分詞である。

⁵⁷ Burkert(1983), 5, 20 は、流血は 'biological inhibition' をもたらすものであるという。Tyrtaios 12.11 も、戦闘の流血は直視しがたいものであることを認めている。

⁵⁸ 古くは *scolia vetera* (Erbse(1969)) ad 71-73 より。Richardson は、*Ilias* と Tyrtaios に共通のモデルとなるような、*Ilias* に先行する protreptic passage の存在を想定している。無論、戦死を何らかの形の敬意をもって受容れ、ある程度やむを得ぬ損失として是認する姿勢はいつの時代にもあつたであろう。15.496 もその一例である。しかし、*Ilias* のこのパッセージは、後述するように、先行モデルを想定しなくてはならないほど文脈にそぐわぬものではない。それまでの protreptic が「カロン」という名のもとに行われたものであつたと考えられる根拠はない。15.496 はむしろ、戦死が積極的に肯定されることがまだなかつたことを示唆する。

⁵⁹ *scolia vetera et recentiora* (Nicole(1891)) ad 22.71.

⁶⁰ *ibid.* および H. Erbse(1969) ad 22.71-3.

レヴェルでの議論は不十分である。Tyrtaios の言説に頼らず、*Ilias* 自体の文言をもとに、22.73 の *kāla* センテンスおよび関連箇所を検討してみる必要がある。

3. 2 「適合関係のよさ」

まず、*kāla* センテンスにおいて「カロン」はどういう意味を表しているかと解すべきか検討してみよう⁶¹。この箇所の「カロン」は与格語 *thanonti* を伴っている。ホメロスにおいては、与格を伴った「カロン」は、「特定の対象との適合関係のよさ」を表そうとすることに用いられるという一つの可能性があることを前章で見た。それによるならば、このセンテンスの概略的な意味は、「(その死体の)全光景は、死者である彼に、似つかわしい」ということであると想定される。この意味ならば、そのすぐ前の *epeoike* センテンス (71-73) とぴったりと歩調を揃えた言説として理解することができる。というのは、まず形式的に、*epeoike* センテンスも、実質的に同じ人物を示す与格語を擁しており、しかも、やはり与格語を伴って「特定対象との適合関係のよさ」を表すことのできる語 (*epeoike*) を構文の中核としているからである。さらにまた、より重要なことであるが、内容的にも、*epeoike* センテンスは「適合関係のよさ」を表したものとなっていると考えられるからである⁶²。

ただし、*epeoike* センテンスが「適合関係のよさ」を表すものであることは、少し説明を要するであろう。このセンテンスは「若者が戦死すること自体の良好性」を表しているようにも見誤られる場合もあるようだが⁶³、この部分の文の流れを見ると、少なくともこのセンテンスを語る時点では、Priamos が「戦死すること自体の良好性」を語る意図を持ちうることは考えられない。Priamos が 71 に至るまでに Hektor に求めていることは、同胞の安全を慮ることなく早々と戦死するという危険を冒すようなことはやめてくれという

⁶¹ 73 の「カロン」は通例、「美しい」、「honourable」など、「適合関係の良さ」ではなく「物事自体の良好性」を表したもののように訳されている。参考までに、一般に行われている 71-73 に対する訳をあげておく。A.T.Murray(Loeb): 'A young man it beseemeth wholly, when he is slain in battle, that he lie mangled by the sharp bronze; dead though he be, all is honourable whatsoever be seen.' P.Mazon(Budé): 'A un jeune guerrier tué par l'ennemi, déchiré par le bronze aigu, tout va. Tout ce qu'il laisse voir, même mort, est beau.' 松平(岩波文庫): 「鋭利の刃に撃たれ戦場に倒れて横たわるにしても、それが若者ならば万事立派に見える、たとえ死んでいても、目に映るものが何もかも美しいのだ。」

⁶² Leaf & Bayfield, ad 22.71 は、'for a young man all is befitting, if he be slain in battle, even to lie cut and torn with a sharp sword' という訳を与えている。さらに彼らは *kāla* センテンスについても、'yea, all beseemth him in his death' と訳している。

⁶³ 事実、松平は *pant' epeoike* 部分を「万事立派に見える」と訳しているし、LSJ s.v. *epeoike* も、この例文に 'it is a seemly thing for a young man to lie dead' という微妙な訳を与えている。

こと(38-58)と、老父を憐れんでくれということである(59. cf.76). 後に残された老人が敵に殺され犬に食われてそれを省みる者もないというような憂目(66-76)は、起こって欲しくないこととして述べられているのである。この流れにおいて注目されるのは、71と73が共に *keisthai* の語で始まっていることである。主人の屍肉を貪り食った後の犬の横たわりと、戦死した若者の横たわりとを対照しているのだ。そしてさらに敵に殺され飼犬に辱められた(当然横たわっているはずの)老人の屍の様子も前者と共にあるといえる。彼がなんとしても避けてもらいたいのは犬と老人の横たわりであり、そのために必要なことは、今 Hektor が退いてくれることと、戦いを若者達が全般に担ってくれることである⁶⁴。そうした場合、死ぬことはまず若者達に降りかかるべき難儀として見込まれるのである。若者の横たわりが Priamos の口に上るのは、のことはそのような論理のもとにであると考えられる⁶⁵。

しかるに *epeoike+* 与格の構文は、2章で示した通り、「物事自体の良好性」には無頓着に、「適合関係の良さ」を表すことができるものであった。このことを知っている聞き手ならば、Priamos は *epeoike* センテンスによって、若者が戦死して横たわるという「取り合わせ」のよろしさのみを、すなわち、「横たわるなら、それは若者であるべきで、飼主を食った犬でもなく、敵に殺された老人でもない」ということを、「若者が戦死するのはそれ自体よろしいことだ」という含みなしに言わんとしているのだと、自然に理解するのである。聞き手がそれ以上のこと、すなわち「若者が戦死すること自体の良好性」をここに聴き取る妥当性もない、といえる。したがって *epeoike* センテンスの意は、「しかし若者にこそぴったりと相応しいのだ、戦いで鋭い刀でもって斬殺されて横たわることは。」ということであると考えられる⁶⁶。

従って、もし、上に示したように *kāla* センテンスは「適合関係のよさ」を表したものと考えるならば、それは *epeoike* センテンスとぴったり同じ適合関係を、位相を変えて言い

⁶⁴ *hoploteros* という語を Homeros が若い人を表す語として使っているということは、若者こそが武器を扱うに相応しい、戦争に従事死するに相応しいという考え方を表していると考えられるが、戦死するのは若者に相応しいことだ、というも、ここから自然に導かれる論理である。

⁶⁵ 彼がここで率先して、若者が「戦死して横たわるのはよろしいことだ」という趣旨のことを言わんとする理由は見当たらない。それを言うことは Hektor が戦士の危険を冒すことを止めさせたいという彼の本来の意図にそぐわないことであり、彼の要求を弱めることでもある。もし彼が、「確たる理由」もなくそのようなことを言うとしたら、それは支離滅裂というほかないであろう。

⁶⁶ たとえもし Richardson ad 22.66-76 の考えるように、若者を戦死に向かわせるような 'protreptic passage' が Homeros に先行する存在していたとしても、そしてさらにそれが「戦死自体の良好性」(e.g.「若者が戦死するのはよろしいことだ」)までも述べたものであったとしても、Priamos がここに言い表そうとしたのは「適合関係のよさ」(e.g.「戦死するべきは若者である」)までであったと考えるべきである。

表そうとしたのだと考えられる。つまり、言説の対象を「死んで横たわっていること」という抽象事項から「屍体(の、目に映っているもの)」という具象物に変えながら、その主体たる若者との同じ適合関係を繰り返し言い表したということになる。「戦死という難儀は若者が担うべきことだ」ということを、「死んでいる彼であっても、彼にはどんな光景も似つかわしい。」と語るというふうに変換しているということである。少なくとも第一義的には、*kala* はそのように解釈されるのである。

3.3 「光景それ自体の良好性」

ただし一つの疑問は、「カロン」は元来「対象自体の(何らかの)良好性」をも含意する、という可能性も否めないということである。その場合は、Priamos は、戦死体(の光景)が若者に「似つかわしいもの」⁶⁷であるばかりでなく、その光景が何らかの「それ自体でよろしきもの」(e.g. 見まほしき光景)でもあるということをも言含めているかもしれないし、たとえ Priamos 自身はそれを言含める意図を持たなくとも、聞き手にはそれが言含められたものとして理解されるということも考えなくてはならない。確かに、*epeoike* センテンスを語るまでは、彼が戦死を歓迎するようなことを言い出すなら、支離滅裂なことであつたし、聞き手がそのように解することも支離滅裂なことであつた。しかし、*epeoike* センテンスを語った後では、事情は異なるのである。正當に語った議論を補強するためであるなら、自分の他の論点がある程度弱めてしまうようなことを発言したとしても、さほど奇異なことではない。彼が、女・子供・老人を守るためには戦死という難儀は若者に担ってもらわなければならないという *epeoike* センテンスの議論を補強するために、若者の戦死(戦死体)には好ましい面もある、と言い添えることは理解しうることである。それが、Hektor にいま戦死の危険を冒すのをやめさせたいという彼の意図にダメージを与えることは、迂闊な口走りとして見過ごしうるものとなるだろう。

また、前章では、与格を伴った「カロン」は、もともと「対象それ自体の良好性」を表す「カロン」に、'dative of relation'などの与格⁶⁸がただ付随的に付されたにすぎない、とい

⁶⁷ 何ものかに「似つかわしい」光景とは、その内容に調和のある光景ということであるが、このことは、その光景がそれ自体としてよしい(好ましい)光景であるかどうか、とは別の問題である。

⁶⁸ 「目に映るものすべて」という「物体」が形容されているとも言えるこの場合のようなケースだと、与格自体が「possessive の代りの与格」(Monro, §143.1; Goodwin, §1170, 1173.)として、物体や人物の所有者を表すといったことも考えうるが、その場合与格として置かれるのは代名詞であるのが普通である。このケースのように、*thanontí* という分詞がそれにその資格で置かれているとしたら異例である。また、「判断者の与格」(dative of reference)は、我々のパッセージの場合には、死者が判断者となってしまうため、考えにくい。

もう一つの考え方もありうることを指摘した。どちらの考え方をとるにしても、*kala* センテンスは、「戦死体(の光景)それ自体の良好性」を肯定している可能性があるのである。もしそれが肯定されているのならば、どういう意味の「良好性」が肯定されていると考えるであろうか。

3.4 若さゆえの「カロン」

戦死して倒れている若者について語る中で、「見えるもの(映るもの)はすべて」(*panta..hotti phanēēi*)という句をあえて「カロン」(*sc.estī*)の主語として立てているということは重要である。このことから、このセンテンスについて、次の2つの事項を読み取ることができる。

その一つは、若者の戦死体が視覚という位相において捉えられており、それが「カロン」だとされているということである。というのは、*phanēēi* という語は、目に見える(映る)ものとして対象を捉えていることを明らかにするものだからである。だから、ここでは「カロン」の意味は、目に見える物体を形容するに相応しい意味を持つものではない。ならば、2章の結果から言えることとして、ここで「カロン」は「視覚的快」または何らかの「機能的良好性」(を反映した外貌)を表すものと推定するのが自然であろう。

読み取ることのできるもう一つの事項は、戦死者が若者である限り、その死体は、どんな様相を呈していてもすみからすみまで「カロン」である、という意味に理解されるということである。*epeoike* センテンスからの流れの中で考えるならば、このことは戦死者の中でも若者に限って言われているということは明らかである。つまり、これが年若い戦死者には適用されないこととして言われていると考えられる。そしてさらに、*panta* という語と *phanēēi* の接続法が示しているのは、戦死者が若者でさえあればこのことがあらゆる場合に適用されるのだ、ということである。若さというものはそもそもそれ自体で「カロン」なるものだという論理が、少なくとも *Ilias* の世界にはあった。つまり、若さや *hēbē* はしばしば *charis* の概念と結び付けられており⁶⁹、*Charis* 女神とは「カロン」の概念を密接なかかわりをもつ女神である⁷⁰。しかるに、若者が戦死するときには、あとに死体と共に *hēbē* が残されるものなのである。「魂は四肢を脱け出して *hēbē* を後

⁶⁹ 14.267=14.275 では、*Charis* 女神たちの epithet が *hoploterai*(younger)である。また、24.248 では、変身した *Hermes* 神の *hēbē* は *chariostatē* とされている。

⁷⁰ *Ilias*.18.382-83; *Ody*.6.18. さらにcf. 5.722-25:*Hebe* 女神が馬車にしつらえる車輪が *thaumaidesthai* とよばれる。

に残して去る」というフォーミュラがそれを示している⁷¹。いまあげた「カロン」の意味は、この論理に合致したものであるから、直ちに理解されうることである。その結果、おのずと思い至るのは、若者の戦死体は、少なくともその若やかな外貌のゆえに「カロン」と認められうるということである。

ただし、戦死体が当然伴っている血や傷自体は、直視しがたいものであるのが自然と思われ、少なくとも血や傷がいちいち視覚的快だと言うとしたら奇異なことであろう。それを含めた死体の光景を、敢えて「カロン」と言っているということは、確かにショッキングな言説である。しかし、おそらくより重要なことは、死体の、傷を受けた部分も受けていない部分も等しく、若者の肉体である限り「カロン」と言っているということである。74-75 が映し出すイメージは、老人の「白い頭髪、白い髭、隠し所」(*polion te karē polion te geneion aidō t'*)が犬に辱められる図である。73 もこれと同じ距離感覚で若者の死体を眺めているとすれば、そこに映るイメージは、血や傷自体ではなくて、血に汚れ、傷を負ってはいても若者の身体と判別できる肉体であろうと考えられる。武器で斬殺されたばかりの若者の肉体ならば、生時の若者のみずみずしさを残したままの肌も伴っているはずである。若やかなる男性が軍事的に「カロン」であるかいなかは、その人その人によるところ大であろうし、またその顔立ちについても同じであろう。しかし、その肌のレベルで考えるならば、個人間に大差はなく、戦闘に参加するほどの若者の肌は皆等しく「美しい肌」と見做されたと考えられる⁷²。

このようなことから、73 の「カロン」が戦死体自体の何らかの良好性を表しているとしたら、それは、若者に特有な視覚的快、すなわち、若者の肉体の美しさ、それもおそらく皮膚レベルでの美しさを表しているというのが、自然に理解しうることである。

若者の戦死体が「カロン」なのはその若さのゆえにである、と言っているのならば、彼の肉体が「カロン」であるのは生前からのことであり、その死に拘りなく死後にもそれが続くものであると言っているに過ぎないのである。もともと「カロン」である若者の肉体は戦闘で死んでも「カロン」なのだ、と言っているのであって、死ぬことによって「カロン」になるといっているのではないわけである。

⁷¹ 16.858:Patroklos, 22.361:Hektor. cf. J.-P. Vernant (1991), 62. このフォーミュラが適用されているのは Patroklos と Hektor だけであるにしても、それは死に際して *hēbē* を後に残したのがこの二人しかいなかったからだ、と解する必要はない。死体への汚辱が試みられるこの二人が、「カロン」なる死体(cf. Hektor の死体の *eidōs agēton*: 22.370)を残していたということを強調するための詩的方策であったと考えることができるだろう。

⁷² *Ilias* 23.805 で、armed duel の競技説明において、特定されていない競技者の、傷つけられるべき

3.5 軍事的良好？

しかし、戦死体が「カロン」という概念につながる可能性は他にもないわけではない。たとえば、称賛に値する奮戦を果たして死んだ戦士がいたとして、もしその戦死体を彼の奮戦の証と見做すならば、それは彼の「軍事的良好性」の現れとなるであろうし、「カロン」なるものであるということもできなくはないであろう。もしそのように考えるならば、死体が「カロン」なのは、当然伴っているはずの血や傷をも含めてのことであり、死体は血や傷自体のゆえに「カロン」なのだという論理も理解できなくはない。

しかし問題は、Priamos のセリフの中にそのような意味を想定することが妥当かどうかである。また、Priamos の言うように、どんな戦い振りであったかに拘りなく、一律に軍事的良好性を認めるような考え方が当時の人々の通念にどのくらいなじみうるものであったかということが問題となる。

「軍事的良好性」に相当するものをこのセンテンスの「カロン」に見てそれを説明しようとしたのは、Vernant である。彼は特にこのセンテンスを取り上げて、「すべてのものが美しい」と言われているのは、血まみれの死が、あたかも現像液のように働いて「*anēr agathos* の eminent quality」を死体の上に浮び上らせるのだが、その quality がそれ自体の美の中に輝くからだ、と述べた⁷³。しかしこの説明は、「*anēr agathos* の eminent quality」なるものをもともと持っているような戦士にしか当てはまらない。戦士はすべて戦死する時に eminent quality を持つことになるのだ、ということを前提にしない限り、若者全般について言った言説であるはずの 73 に対する正当な説明とはならない。別の論文では、彼は、若さと軍事的良好性とを関連付ける。 *hēbē* とは年齢よりも体力・身体コントロール・敏捷さを意味するものであり、「*hēbē* と共に残された死体」が持つ「若さの輝き」が、「死体の美」をなすのだと述べた。その美は、彼の勇敢さ(*vaillance*)を思い起させる血や傷によって高められるものだとも言う⁷⁴。すなわち、血や傷を伴った「若さ」ある戦死体は、それ自体の「若さの輝き」と、そこに思い起される生前の奮闘・活躍のゆえに「美しい」のだ、と説く。しかしこの説明もやはり、戦士の奮闘・活躍を前提としており、73 で言われている若者全般の戦死体についての言説にすんなりと当てはまるものではない。彼の考えに従うならば、戦闘で殺されることが勇敢さの証だ、という逆接めいた命題を認めなくてはならないことになるのである⁷⁵。

肌が、「美しい肌」(*chroa kālon*)と表現されている。

⁷³ Vernant (1991), 84.

⁷⁴ Vernant (1991), 61-64.

⁷⁵ この「逆説」は Tyrtaios 以降、真となる。ただし、それが成立するためには一定の前提が必要なので

Priamos が 22.73 で「カロン」だと言わんとしたものに何らかの「軍事的良好性」をたどりうるかどうかは、用いられている言辞から考えてみるべきである。71-73 の戦死の表現を見ると、戦士の卓越はおろか奮闘なり果敢なりの「軍事的良好性」を示唆する言葉は全く見当たらない。15.496 の「祖国のために戦いながら」(*amūnomenōi peripatrēs tethnamen*)という言辞に比べてみると、「戦闘において切苛まれ死んで横たわっている」(*Arēi ktamenōi, dedaigmenōi oksei chalkōi, keisthai*)というだけの表現が描き出すこの箇所のイメージには、軍事的にポジティブなものは何もないことは明らかである。Priamos はむしろ、戦士たちの戦死に至る行動の肯定的価値を示唆することは一切排して、「戦死」という概念を肉体的側面から最も単純にとらえた表現をしていると考えられる。だから、ここに戦死者の何らかの軍事的良好性が示唆されているとは考えにくいし、Vernant の上の解釈も妥当性を失うのである。

ただしもし、いかなる奮闘をして果てるかに拘らず、(若者の)戦死はすべて軍事的に良好なことなのだ、としてこれを受容れるような考え方を持てしむのならば、話は別である。もちろん、戦死という形の貢献に対して一定の敬意を表することは Homeros の世界でも当然あったものと考えられる。しかしそれを、「カロン」という直接的に肯定的な語で一律に評価するような考え方があったかどうかは大きな問題である⁷⁶。そのような考え方が Homeros のもとには存在しなかったという確たる証拠はない。しかし我々が確実に言えることは、73 のような文言は存在しても、そのような考え方が存在したとは言い切れないということである。なぜならば、73 の「カロン」は、戦死自体の良好性ではなく、若者の肉体の美しさを表すものとして言われた可能性が大いに見込まれるからである。73 があるからといって、すべての戦死を、一律によきものとして肯定するような考え方が Homeros のもとに存在したとは決めてかかることはできないし、「カロン」という語が戦死そのものの良好性を表すものとして用いられたと言い切ることもできないのである。

この問題と密接に関係してくるのが、15.496-97 のパッセージである。Hektor は、死を恐れず戦闘に邁進するよう、トロイア勢とリュキア勢に向かって勧告するとき、「祖国のために戦いつつ死ぬことは不名誉なことではない」(*ou hoi aeikes amūnomenōi...tethnamen*)という言い方をする。「祖国を防衛している最中の死」という積極的意義を明らかにしたうえで、しかも死を厭わぬことを目的として語られる言

ある。4章を見よ。

⁷⁶ 7世紀になって Tyrtaios は、「前線において戦いながら死ぬこと」が「カロン」である、と条件付で提唱をする。しかし、5世紀には、戦闘中に死にさえすれば戦闘ぶりによらず「カロン」なる戦死者と呼

葉であるから、死を最大限に称揚してもおかしくない機会なのに、死を形容する表現は、*ou + aeikes* という消極的な言い方に留まっている⁷⁷。「カロン」のような積極的評価の語を肯定の形で使うには至らないのである。このこともやはり、すべての戦死を一律に肯定するような価値観が Homeros の元にはまだ存在していなかったという可能性を崩すものではない。

実際、Homeros において戦死が何らかの形で肯定的に評価されるケースを探してみると、非常に少ない。その稀なケースの一つは、21.279-80 でスカマンドロス河に押流される Achilles が、むしろ Hektor に討たれていなかったと望む場面である。彼はそれが、「*agathos* なる者が *agathos* なる者を殺すこと」(*tō k' agathos men epephn', agathon de ken eksenarikse*)であるとして、望ましいことを説明している。それはつまり、戦いに敗れるにしても、自分が遜色ない働きをしたことが否定されずに済む、という特殊な場合なのである。もう一つのケースは、22.110 で Hektor がトロイアの城の前で一騎討ちにおいて Achilles に討たれることを *eukleīōs olesthai* と表現する場面である。この戦死が「名高いもの」とされるのは、彼が 18.285-310 で、強敵 Achilles に果敢に挑むことを宣言して群集から歓呼と称賛を受けたことを踏まえたものである。すなわち、この戦死の肯定は、やはり、非常に高い水準の戦いを果たした結果としての戦死であることを前提としている。戦死を肯定する言説がこのような例しか見当たらないということは、高い水準の働きを果たしながらの戦死でなくては、よきこととして肯定されることが殆ど行われなかったという現実を示唆するものである。「カロン」の語を使うか否かに拘らず、戦死自体がよきものと評価されるようなことはむしろ例外的なことであったということが推測される⁷⁸。

以上からいえることは、Priamos が戦死体を「カロン」だとした言説の中に、戦死自体を「カロン」なるものと見做す思考を認めることは、不可能ではないにしても考えにくいことである。もともと、このパッセージが「カロン」だとしているのは、「戦死体(の光景)」であって、「戦死(すること)」ではない。戦死(すること)自体が「カロン」であるか否かについて

ばれ得る状況があったことを Thuc. 4.40.2 は暗示する。

⁷⁷ Zanker(1994), 145 は、15.496 を、'it is no shameful thing' と訳した上で、'that is, it is a matter of glory' と言換えている。Yamagata(1994), 228 も、この箇所を 'it is not unseemly to die...' と訳してはいるが、それを明らかに「カロンなる死」と同等視している。もし、戦死が「カロン」で肯定評価されているという事実が既にあるという状況でならば、*aeikes* の否定が「カロン」の肯定と同じ意味で使われていると考えてもさしたる問題はないだろう。しかし、肯定評価されているという事実が他にない状況であれば、*aeikes* の否定と「カロン」の肯定との違いの大きさを見過すべきではない。

Snell(1974), 324 が、このパッセージについて Tyrtaios との比較において述べていることは正しい。

⁷⁸ 15.496 は、「祖国のために」、「防戦している最中に」、という条件が整わない死は、むしろ *aeikes* でありうるということをも示唆しているように思われる。

は、何の示唆も与えようとはしていない、というのがおそらくは正しいであろう。たとえ Priamos なり作者なりが、戦死自体を何らかのよろしきものと見做す思考を持ち合わせていたとしても、この言辞は、死体が、死なり傷なり血なりゆえに「カロン」なのかどうかということをはっきりさせようとはしていないのである。

3. 6 poetic purpose

Ilias の詩作上の意図からすれば、それで十分に一つの目的を達成していると考えられる。詩の構成から見ると、若者達の戦死体がみな「カロン」であることをこの箇所ですべて示しておくということは、まもなく凌辱を受けることになる Hektor の死体が 22.370 で「端麗な容貌」(*eidōs agēton*) を持つものとして提示され諒解されるための下準備となっている、というのは Vernant の言うとおりで⁷⁹。73 は、とりあえずすべての若者の戦死体について、物理的良好状態が期待されることを示し、潜在的に物理的凌辱の恰好の餌食となりうるものであることを予め教えているのである⁸⁰。そういうことがこの箇所の詩作上の意図であったとすれば、戦死自体が「カロン」であるのか否か、ということは作者にとってはどうでもよいことであったと考えられる。

3. 7 結論

以上、この章の考察をまとめると、まず 22.73 の「カロン」が表している可能性のあるものとして、次の3つをあげることができる。

- ①戦死体の光景が若者に似つかわしい、ということ、
- ②戦死者の若やかなる肉体のもたらす視覚的快、
- ③戦死者の戦死したこと自体のよろしさ(好ましさ)。

ただし、①が第一義として認められる。②も含意されていると考える余地は十分ある。③の含意は、不可能とはいえないが、考えにくいことである。したがって、次のように結論することができる。戦死(すること)を「カロン」なることと見做す思考のはっきりとした形跡は、Homeros の中には認められない。そのような考え方が行われたという可能性

⁷⁹ Vernant(1991), 63, 84.

⁸⁰ 英雄の戦死体がやがて凌辱を受けることの意義は、戦死体に当初の「美しさ」があればこそ増幅される、という Vernant(1991), 67-74 の説は正しい。Griffin(1980), 134, 138 は、'beauty brought low' のモチーフと名づけている。

も小さい⁸¹。

以下に、「カロス・タナトスとは何か（下）」として、4 章: Tyrtaios の「カロンなる死」、5 章: 戦死ではない「カロンなる死」、6 章: まとめ、Bibliography、Appendix が続く。平成 14 年度の『名古屋大学文学研究科研究論集』に掲載の予定である。

⁸¹ Loraux(1995), 65-66, 275n25 は、古典期アテナイにおいて受容られていた *kalos / eukleēs thanatos* という概念は、Ilias 的なものではない、と、Ilias についての議論を省いて簡潔に言い切っているが、この結論は趣旨としてはそれと同じことである。

Bibliography

- A.W.H.Adkins, *Merit and responsibility: a study in Greek values* (1960)
- A.W.H.Adkins, 'Callinus 1 and Tyrtaeus 10 as poetry', *HSCP* 81(1977)
- G.Autenrieth (tr.R.Keep), *Homeric Dictionary* (1887, 1995)
- S.Benardete, *Sacred Transgressions: A Reading of Sophocles' Antigone* (1999)
(originally 1975)
- M.Bloch, 'Death, women and power', in J.Parry & M.Bloch (ed.), *Death and regeneration of life* (1982), 211-30
- E.Bowie, 'Miles ludens? The problem of martial exhortation in early Greek elegy', in O.Murray (ed.), *Sympotica* (1990), 221-29
- C.M.Bowra, *Early Greek elegists* (1969)
- C.M.Bowra, *The Greek experience* (1957)
- W.Burkert, *Homo necans: the anthropology of ancient Greek sacrificial ritual and myth* (1983) (originally German 1972)
- D.A.Campbell, *The golden lyre* (1983)
- C.M.Dawson, 'Σπουδαιογέλοιον: Random thoughts on occasional poems', *YCS* 19(1966)
- W.Donlan, 'The origin of καλὸς κἀγαθός', *AJPh.* 94 (1973)
- H.Erbse ed., *Scholia graeca in Homeri Iliadem* (1969) (in TLG)
- R.Garland, *The Greek way of death* (1985)
- D.Gerber, *A companion to the Greek lyric poets* (1997)
- W.G.Goodwin, *A grammar* (1879, 1992)
- J.Griffin, *Homer on life and death* (1980)
- S.Humphreys, *Family, women and death* (1983)
- W.Jaeger, 'Tyrtaeus on true arete', in *Five essays* (1966), 101-142.
- G.S.Kirk, *The Iliad: a commentary, volumel: books1-4* (1985)
- W.Leaf & M.A.Bayfield, *The Iliad of Homer in two volumes* (1898, 1952)
- N.Loroux, 'Hēbē et andreia: deux versions de la mort du combattant athenien', *Ancient Society* 6(1975)
- N.Loroux, 'The Spartans' "beautiful death" ', in *The Experiences of Tiresias* (1995), 63-74. (originally French 1977)

- N.Loroux, 'Mourir devant Troie, tomber pour Athenes', in *Information sur les sciences sociales* 17.6 (1978), 801-17.
- N.Loroux, *The invention of Athens* (1986) (originally French 1981)
 北嶋美雪、『ヒippias大』訳および解説、田中・藤沢編、『プラトン全集』、第 10 卷(1975)
- D.B.Monro, *A grammar of the Homeric dialect* (1891,1986)
- I.Morris, 'Attitudes toward death in archaic Greece', *Classical Antiquity* 8(1989)
- G.Nagy, *The best of the Achaeans* (1979)
- J.Nicole ed., *Les scolies genevoises de l'Iliade* (1891)(in TLG)
- T.C.W.Oudemans & A.P.M.H.Lardinois, *Tragic Ambiguity: Anthropology, Philosophy and Sophocles' Antigone* (1987)
- W.K.Pritchett, *The Greek state at war*, part 4(1985), part 5(1991)
- N.Richardson, *The Iliad: a commentary, volumel: books21-24* (1993)
- H.W.Smyth, *Greek grammar* (1920,1956)
- B.Snell, 『精神の発見』(1974). (originally German 1955)
- C.Sourvinou-Inwood, 'Reading' *Greek death: to the end of the classical period* (1995)
- W.J.Verdenius, 'Tyrtaeus 6-7D: a commentary', *Mnemosyne* 22(1969)
- E.Vermeule, *Aspects of death in early Greek art and poetry* (1979)
- J.-P.Vernant, 'Panta kala: From Homer to Simonides', in *Mortals and immortals* (1991), 84-91. (originally French 1979)
- J.-P.Vernant, 'A "beautiful death" and the disfigured corpse in Homeric epic', in *Mortals and immortals* (1991), 50-74. (originally French 1982)
- M.L.West, *Greek Lyric Poetry: the poems and fragments of the Greek iambic, elegiac, and melic poets down to 450 B.C.* (1993)
- M.L.West, *Iambi et elegi Graeci*, vol.2 (1972)
- M.M.Willcock, *The Iliad of Homer: books I-XII* (1978)
- N.Yamagata, *Homeric Morality* (1994)
- 吉武純夫、*「カロス・タナトス、アンティゴネの目指したもの」*、『西洋古典学研究』50(2002), 45-55
- G.Zanker, *The heart of Achilles: characterization and personal ethics in the*

Iliad (1994)

Thesaurus Linguae Graecae CDRom #D (Irvine 1992)

TLG Workplace, ver.6.0 (1997)